素クールを君へ

マカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
素クールを君へ

【Ｎコード】
Ｎ６２９９Ａ

【作者名】
マカ

【あらすじ】
素クールってこういうので良いのかな？と思いつつ書いたものです。

残暑も終わろうとしている九月の下旬。授業も終わり、校庭から喧騒が聞こえ、日は傾き生徒会室の窓から西日が入ってくる。
「伊里宮、この書類のコピーを頼む」
「はい」
「伊里宮、これ後でまとめておいてくれ」
「はい」
「伊里宮、これを職員室に持っていてくれ」
「はい」
「伊里宮、茶」
「はい」
「伊里宮、好きだ。付き合ってくれ」
「はい……っては？」
今、なんつったこの人。
さぁ、ここでちょっとした自己紹介。僕は伊里宮文人（いりみやふみと）、どこにでもいる感じの学生……のはず。私立桐ヶ宮高校に通う一年生。悪友の陰謀により何故か、生徒会書記をさせられている。
で、今偉そうに（偉いんだけど）、僕に命令していた人は生徒会会長、桐ヶ宮氷室（きりがみやひむろ）、家系に異国の血が混ざっているらしく、肩甲骨の辺りまで伸ばされた髪は銀であるのに目は黒い。僕より頭半分ほど背が高く、そこらを歩けば、そのばにいる全員が振り向いてしまうであろう美貌を持ち、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる、ぶっちゃけ男子生徒憧れの人である。しかし、性格に微妙に難がある為、現在彼氏はいないらしい。あと、基本的に無表情で顔で感情を表すことは少なく、氷の人と呼ばれてもいる。
その人が何故に僕に告白をしてきたんだろうか。いや、もしかしたら聞き違いかもしれない。
「伊里宮、茶だ」

僕がさっさとお茶を出さないことで若干不機嫌なのか眉間にしわを寄せている。
「いや、そんなことより。なんて言いました？」
「む、聞いてなかったのか、だから茶だ」
「いや、そんなお約束はいいですから、その前です」
「……」
会長は思い出すように顎に手をあてて悩むような仕草をする。三秒ほど経ってああ、と呟くと、口を開いた。
「告白のことか」
「そうです」
「もう、返事はもらったものだと思っていたのだが」
「いや、あんな勢いで言ってしまったものを本気にしないでください。それに会長は何故にいきなり僕に告白するんですか」
「君に惚れたからに決まっているだろう」
いや、そんなさらっと言ってもらっても困るんですけど。
「信じていないような顔だな」
「そら信じられませんよ」
「ほんとなんだがな、メロメロだぞ？　ラブラブだぞ？」
そんな淡白に言われてもなぁ。
「じゃあ、あれだ。もっと解りやすく」
さも妙案だと言わんばかりに人差し指を一本立てて言い放ちやがった。

「子供を作ろう」

意識が一瞬遠のき、体から一気に力が抜け、立てる力も失い、僕は前に倒れた。
がすっ！
「どうした。いきなり机の角に額をぶつけて、もしや君はそういう趣味があるのか？　ふむ、仕方あるまい多少抵抗はあるが、君のた

めだ」
会長がごそごそと机の引き出しから、何やら取り出し、それを目で捉えた僕は急速に覚醒した。
「ちょっ、なに鞭取り出してるんですか、低温蝋燭も！」
「君がこういう趣味を持っているかも、と思案をしておいて正解だった。安心しろそれなりに勉強もしてある」
「あ、安心できねー、それに僕にそんな趣味はないです」
こ、この人本気で何を考えているんだ。
「なんだそうなのか」
残念そうに息をついて、鞭と蝋燭をしまう会長。
「では、君は正常（ノーマル）で異常（アブノーマル）ではないのだな」
「そのつもりです」
「そうかでは」
「へっ？　うわ！」
やっと立ちあがったところで、会長が僕に覆いかぶさるような形で押し倒してきた。
「な、何をするんですか」
「いや、実行しようと思ってな」
「やーめーてー」
「君は私がそんなに嫌いか？」
真剣な目でじっと見つめてくる会長。
ぶっちゃけ、この状況は卑怯だと思う。夕陽に照らされた銀糸はキラキラと輝いて、白磁を思わせるような白い肌をより際立たせ、何よりも会長の頬がほんのりと赤くなって見えるのは反則だ。
それに僕は、
「そんな訳ないじゃないですか、僕も好きです」
言ってしまった。これは何よりの事実で隠しておいたもの。それにじゃなきゃ、会長に彼氏がいないことを調べたりなんかしない。
「……そうか」
会長は一瞬呆けたような顔をしたような気がしたけど、

「それは好都合だ」
悪魔よろしく、と言わんばかりににやりと口の端をゆがませ、僕の学ランに手を掛けてきた。
「えっ、ちょっそんな、かいちょうぉぉぉぉ！」
僕の声は学校中に響き渡ったとか渡らなかったとか。

＜終わり＞

（後書き）

素クールって聞いて書いてみようと実践した話です。
感想送っていただけたら、調子に乗って長編で書くかもしれません。
因みにこのあと二人がどうなったかは秘密です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6299a/

素クールを君へ

2010年10月10日00時25分発行